

大正五年（二十歳）

原田彦太郎を通じて西島麥南と知る。後、共に武者小路實篤の「新しき村」の會員となる。當時、谷中に住んでゐた白水郎居の街頭會に毎月出席した。

大正六年（二十一歳）

十二月二十日發行、靱山書店版、大場白水郎編輯の句集「藻花集」に十數句をとどめてゐる。自宅の二階を「茅庵」と稱し俳名を「茅舎」と號した。十二月「雲母」の雑誌に作品登掲されてゐる。（同誌への投句は蘭歌的に昭和四年二月號に及ぶ）

大正八年（二十三歳）

知人、島丈道より、京都東福寺塔中正覺庵住職、平住溫州に紹介され後、春秋に訪庵、繪を描き句を作つた。

大正十年（二十五歳）

大正十四年（二十九歳）

俳誌「土上」に投句する。

大正十五年（昭和元年）（三十歳）

原田彦太郎の「かぶらや」に岸田劉生、西島麥南、中村秀好、坂東養助、清宮彬、原田巨鼻人等と相會して「蕪菁會」を折々催した。

昭和二年（三十一歳）

二月十九日、鎌倉、岸田邸にて「蕪菁會」あり、初人、丹童（劉生）と偶會を催す。

昭和三年（三十二歳）

二月二十三日、實母、ゆき（六十二歳）死去。四月五日、兄龍子、大森區桐里町二七三番地に一戸を建て、父信吉、茅舎を迎ふ、定住する。

昭和四年（三十三歳）

六月二十八日、兄龍子、「青龍社」創立、九月六日

「新しき村」の會員であつた關係で、鶴沼時代の岸田劉生に畫學生として師事することになった。

大正十一年（二十六歳）

十一月、兄龍子はじめて岸田劉生に會ふ。草土社展に出品入選。

大正十二年（二十七歳）

九月一日、日本橋區蠣殻町に於て父母と共に震災に遇ひ、家屋焼失、八日、信州に向ひ、九日、遊温泉、原泉館に落ちつく。十五日、父母を残し單身出京、十六日着京、十九日離京、二十日京都、東福寺内、正覺庵に着く。十月四日、避難移住の岸田劉生を訪ふ。十二月三十一日、劉生の家に泊り越年。

大正十三年（二十八歳）

一月一日、一月二日、劉生と共に在り。この頃、繪に句に精勵し、正覺庵での作品多し。この年、春陽會に出品、靜物二點入選す。十一月「ホトトギス」雑誌巻頭。

より第一回開催。

十二月二十日、徳山にて岸田劉生死去、二十二日、鎌倉に遺骸を迎へ、二十三日、出棺を見送つた。

昭和五年（三十四歳）

當時、繪に俳句に親交ありし中村秀好等と句會を催し、水原秋櫻子とはじめて面接する。劉生歿後、漸く繪に遠ざかり作句に専念する。

昭和六年（三十五歳）

星野立子主宰「玉藻」に文章四篇を發表する。考ふるところあり、日記を全部整理して焼却する。十一月、「脊椎カリエス」のため昭和醫學附屬病院、外科に入院。當時、同校に教鞭を執る水原秋櫻子の慰問を受けることしばしばであつた。これより概ね病臥の生活に入り、蘭病十年に及ぶ。

昭和七年（三十六歳）

二月、退院、自宅療養をはじめ。「ホトトギス」に「俳句開眼」「巢」を發表。「玉藻」